

## 「現在の研究について」

明海大学不動産学部 講師 上地聡子

・ 2022年3月17日 パリ高等研究院日本研究所「Global Japan. History of the world - history of the worlds as seen from Japan」セミナーにてオンライン報告

・ 報告タイトル：『沖縄人』感覚の形成：第二次世界大戦直後、在外同胞はいかにして故郷の情報を共有したか

・ 報告概要：太平洋戦争直後の数年間を対象に、ハワイや北米、南米の沖縄移民（“在外同胞”）の間で、それぞれの地の新聞や冊子が転送・共有されていた実態を明らかにした。その上で、地上戦の現場となった故郷沖縄に関する情報が国境を超えた沖縄ネットワークを介して共有され、それぞれの地域の沖縄出身者が沖縄救済運動に立ち上がる現状を沖縄系メディアで見聞きするという経験が、環太平洋地域を挟んだ沖縄人の中に「同胞」感覚を醸成していった可能性を示した。最後にこの研究が持つ学術的インプリケーションとして、①民族自決という国際潮流の時代において「独立」と「併合」の二項対立に回収できない側面を考慮する必要と、②エスニックメディアや沖縄人ネットワークを通じて「私たち」と「世界」との関係性、という自意識が形成され始めていた可能性を指摘した。

・ 以下、発表で使用したパワーポイントを抜粋します。



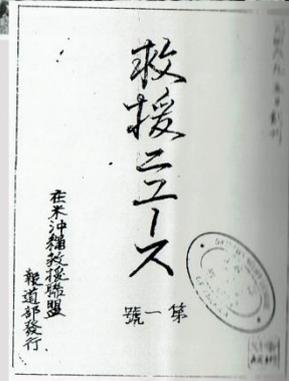
**Constructing a Shared Sense of  
“We, Okinawans”:  
How Overseas Okinawans  
(Zaigai Doho) Shared  
Information about their Home  
Islands  
in the Immediate Post-World  
War Two Period**

Center for Japanese Studies at the EHESS  
2022.03.17  
Uechi Satoko

領土問



Above: Commemorative photo of the Association of Okinawan people, U.S., 1941



Right: Kyuen News, first issue, September 1946

Uruma Shimpo,  
Okinawa



Jiyu Okinawa, Tokyo



更生沖縄, Hawaii

**KOSEI OKINAWA**  
REBORN OKINAWA



Kaiho, U.S



Left: Parcels from Hawaii,  
Okinawa central post office, 1948



Right: Welcome Reception for five Okinawan  
exchange students, Honolulu, 1948

10

## Implications

Okinawan people and the status issue in the early 1950s as a case study

- To demonstrate the complexity between “independent” and annexation at the time of “self-determination”
- To suggest the process in which people began to be conscious of the relationship between “us” and “the world” through media and ethnic networks

13

• 写真の出典：

沖縄県立図書館 比嘉春潮文庫所蔵資料

沖縄県公文書館オンライン「資料紹介」

『ウルマ新報』（復刻版）不二出版.

『沖縄新民報・自由沖縄』（復刻版）不二出版.

北米沖縄人史編集委員会編『北米沖縄人史』（1981年）

## 上地ゼミの活動

明海大学不動産学部 講師 上地聡子

「不動産学研究」の上地クラス（上地ゼミ）は、第二次世界大戦後の日本における闇市やバラック街に関するテキストを皆で読み解き、レジュメやパワーポイントにまとめる力、それをもとに発表し論点を提示する力、ディスカッションを通じて様々な視点に気づく力の涵養を目指します。

2022年度後期は、本岡拓哉『「不法」なる空間に生きる：占拠と立ち退きをめぐる戦後都市史』（大月書店、2019年）を読み進めています。



ゼミのメンバーはまず、自分の関心をもとにテキストの担当する章を決めます。初回は教員が大枠を提示しますが、それに続く回は全て章の担当グループが報告、論点の提示、ディスカッションを担当します。教室では大いにつまずき、間違えることが重要だと考えるので、議論がつまっても教員はなるべく論の整理に徹し、学生の自主性にまかせるようにしています（でもつい喋り過ぎてしまうのが反省点です）。

報告者はテキストの内容の他にインターネットで探したデータや論文を紹介したり、地図を掲載して説明するなど、回を重ねるごとに様々な工夫がみられるようになります。また報告担当ではない学生から逆に論点が提示され、それを話し合うこともあります。

1年間のゼミ活動で得た知識と読解力、まとめる力と議論する経験は、大学を出たあとも大きな財産になると信じています。以下に上地ゼミの様子と講義資料の一部を紹介します。

### ・上地ゼミの様子



・『「不法」なる空間にいきる』序論および第1章スライド（教員作成）

本書では

...「バラック街」という空間を少し広い観点から問う

戦後のバラック街 ⇔ **全体像**の把握を目指す必要がある

先行研究におけるバラック街の位置づけ

・住田（1968） 不良住宅地区の類型化の中で

仮小屋集団地区  
「パタヤ」地区



撤去 → ほとんど消滅と位置づけ

それぞれの地区の歴史的経緯に多様性 三浦（2006）

・合意のもと、集団移転 : 御笠川、博多駅

・市が改良住宅を提供 : 京都東7条

・代替地斡旋の住民要求を拒否 : 兵庫県武庫川

課題

- ・戦後日本の都市部の「バラック街」の状況を、**総合的網羅的な視点**で把握（p.5）
- ・生成から消滅までの過程の、さまざまな主体による営為や、それを構成する諸力に目を向けること（pp.5-6）

基礎とする空間論：ドリーン・マッシー（2014）

空間＝相互関係性の産物として、多様性の存在可能性の領域として、常に構成の過程にあるものとして、捉える（p.7）

## 第1章 「不法」なる空間のすがた

(PP.10-41)

### 1. はじめに

**戦後の都市において「不法占拠」地区はどのように生成し、如何なる実態だったのか？（p.10）**

これまで研究のない理由

1) 消滅が当然 = 研究対象から除外？

2) 資料的問題 = 自治体で廃棄（プライバシーその他）

唯一の調査：『東京都地区環境調査一都内不良環境地区の現状』（1959年）by 東京都民生局

・調査対象が「不法占拠地区」

・1950年代後半が「不法占拠」地区数が最大 or 最も可視化された時代と想定

なのにその中の「不法または不当な土地使用状況にある地区」の実態や位置づけがされていない（p.11）  
⇒ **本章の分析対象に**